

1 「日韓併合」についての誤った講話

ところが、日本から高官を派遣し、無尽蔵といって良いほどのお金をつぎ込んでも、朝鮮の改革は一向に進まない。進むわけがないのです。昔も今も同じです。

政府高官の間で汚職や賄賂が横行していて、誰も民衆を省みようとしないのです。

日本では、民衆は天皇の宝物（大御宝／おおみたから）と認識されます。朝鮮ではそれが、ただの収奪対象でしかないのです。

こうした状況に、ついに朝鮮の民衆も立ち上がりました。

明治42(1909)年、李容九(りようきゅう)が当時の大韓帝国最大与党（自称100万人）の一進会(いっしんかい)が「日韓の合邦を要求する」という声明を出したのです。

これは、朝鮮人民衆の悲鳴でした。

（「朝鮮人民衆が立ち上がり日韓併合を決意した」＝「朝鮮人民の希望で日韓併合が成立した」など考えられますか？日本が韓国を日本に併合したので。さもないとすれば主体性が無い韓国はロシアに併合され日本の独立が危なかったからです。）

けれど、日本では、これに対して否定的でした。

とりわけ初代韓国統監を勤めた伊藤博文は「あくまで、朝鮮の改革は、朝鮮の人々が自分たちで行うべき。むしろ異民族がはいってくると、日本がたいへんなことになる」（よくご存知で）と、朝鮮の併合には真っ向から反対の意思を表明していました。

要するに、朝鮮の合邦論者にとって、まさに（朝鮮併合に反対する）伊藤博文が、敵になったのです。

（伊藤博文は朝鮮の「内政改革」には熱心であり、どちらかと云うと「併合」には反対であったかもしれないが当時の日本の内閣「桂太郎首相・小村寿太郎外相他」は朝鮮を併合しなければロシアが併合し日本の独立も危うくなると考えていたので伊藤一人が蚊帳の外であっただけである。）

そして、伊藤博文は、朝鮮人テロリストの安重根(あんじゅうこん)によってハルビン駅頭で暗殺されました。

（如何にも伊藤が「日韓併合」に反対であったから民衆の一人である安重根に暗殺されたように書かれているが、事実は「伊藤はむしろ日本人としては「併合反対派」であったにも拘らず安重根は「併合に最も熱心な日本人」と勘違いして暗殺したのである。＝事実と全く異なる表現である。（ ）

状況を知る日本にいた欧米列強の公使たちは、白人です。

この時代、白人以外の有色人種は、本当に「人」であるかが、真面目に議論されていた時代です。

要するに有色人種は人ではなくて、ヒトモドキ、もしくはサルかケモノであり、だから殴っても斬っても、有色人種は痛みを感じることがない、などと、真剣かつ真面目に思われていた時代です。

そうした時代下にあって、日本は、パリ講和会議で、人種の平等を国際連盟憲章の第一条に入れるべきだ、などと大真面目に提案していたのです。

欧米の白人たちからしてみれば、朝鮮のサルかヒトモドキが、当時ようやく人の仲間入りを果たした日本と「対等に合邦」などと言い出したものだから、これはもう大笑いです。

なにせ当時の日本は、世界最強の大帝国、七つの海を支配する大英帝国と対等な同盟国です。

ということは、その日本と韓国が対等に合邦するということは、韓国は英国とも対等だというわけです。

他国との約束さえ守ることができず、国王自らが平気で裏切り行為をして密書を送り、王家の歳費と国家財政との区別さえもできないサルが、天下の大英帝国と対等ということは、俺たちは、それ以下？、これはもう大爆笑以外の何ものでもない。

だから欧米各国は、「おいおい日本さんよ、あんたがそこまでして有色人種も人間だというのなら、あの韓国サルの面倒をみてみなよ」という話になった。

結果、日本は引っ込みがつかなくなって、明治43(1910)年8月に、日韓併合が行われるわけです。

韓国は、これに大喜びしました。

李完用首相をはじめとする、閣僚以下全員（病欠していた文部大臣の李容植(りようしょく)を除く）が、そして韓国民衆までもが日韓併合を、まさに「大歓喜」したのです。

（韓国の希望で「日韓併合」が成立したなど、とんでもないでたらめであり、あくまでも日本の意思で「併合」が成立したのである。日本が「併合」しなければ、韓国は自律神経失調症の状態であったから、ロシアか中国か西欧諸国に

「併合され」それにより火の子が日本に飛び移り日本の独立が危うくなるので仕方なく「併合」に踏み切ったのが実情である。)

そして韓国は、経済も、教育も産業までもが発展し、わずかの間に人口が倍増し、朝鮮半島の共通語である韓国語ができ、近代化が一気に進むわけです。

ところがそこまでしてもらった恩義を忘れ、戦後は、反日にシフトし、いまや国をあげて日本を悪者視して大統領からして率先して世界中に告げ口外交をしています。